

夢のつぼ

鹿児島県立大島高等学校 一年 森 佳美

昔々、あるところにネリヤ国という国があり、そこにいたずら好きのカナヤ王子がいました。いろんな人にいたずらをしては、その反応を見て楽しんでいました。

ある日、いたずらをしてにげているとき、王さまが大切にしていた小さなつぼにぶつかって割ってしまいました。

カナヤ王子は、王さまに怒られるのが恐いので、壊れたつぼの破片を集めて、自分の部屋の洋服入れの中にかくしました。そして、つぼのことを聞かれたとき、カナヤ王子は「知らない」とだけ答えました。

それと同じ時に、不思議な病気が国に流行りました。その病気は、眠ったままぐんなに起こしても起きない病気でした。国のお医者さんにみせても、原因が分からないのです。

その病気は、とつとつお城の中でも流行り始めました。最初に、病気になったのはお妃さまでした。カナヤ王子は、とてもショックでした。カナヤ王子は、「お母さんを助けたい」と思いました。カナヤ王子は、泣きながら寝ていました。

カナヤ王子が起きたところは、見たことのない所でした。草一つも生えていない地面に寝ていました。カナヤ王子は、とても怖くなりました。するとそこに女の子がいました。

カナヤ王子は、その子に話しかけました。

「ねえ、ここはどこの？」

「ここは、『夢の中』よ。けど、ここからは出られないの。」

と、その子は言いました。

「どうして出れないの？」

と、カナヤは聞きました。

「だってここは、『夢の魔王』が支配していて、私たちの『夢』を食べてしまつたの。だから、もう『本当の世界』に戻れないの。」と、涙を浮かべながら言いました。

「じゃあ、僕がその『夢の魔王』を倒す。そうすれば、ここから出られるんですよ。」

と、カナヤは言いました。

「けど、『夢の魔王』は、『夢のつぼ』というつぼに封印しないといけないの。けど、『夢のつぼ』は、壊れてしまったの。だから、『夢の魔王』を封印できないわ。」

カナヤは、自分が前に割ってしまった小さなつぼのことを思い出していました。カナヤは、自分がとても悪いことをしてしまつた事に気づきました。カナヤは、とても悲しくなりました。

すると、ポケットにへんな感じがしました。見てみると、それは割つたつぼの破片でした。しかも細かった破片がくつついて少し大きい破片になっていました。カナヤはそれを女の子に見せました。女の子は驚いて、

「それよ。その破片を全部くつつけられれば、『夢の魔王』は封印できるわ。たしか、この世界では人が喜ぶことをすれば、物が少しずつ直っていくって聞いたことがあるわ。」

カナヤは女の子にお礼を言うと、『夢のつぼ』を直し、『夢の魔王』を封印する旅に出ました。『夢のつぼ』を直すのはとても大変でした。歩けないおばあさんのためにご飯を作ってあげたり、おぼれている犬を助けてあげたり、きこりのお手伝いをしたりしました。

けど、カナヤは助けた人たちの笑顔を見るたびに、幸せな気持ちになりました。そして少しずつ、つぼは形を取り戻していききました。

しかし、最後のひとかげらになったところで、どんなに人が喜ぶことをしても戻らなくなりました。カナヤはそれでもがんばって人が喜ぶことをしました。やっていけば、絶対に戻ってくると思ったからです。

そしてとうとう、『夢の魔王』のいるお城の近くの町にきました。カナヤは、町の人たちが集まっているけいじ板の方へ行きました。

そこには、こう書かれていました。

『我に反する者が現れた。その者を見つけし者は、一元の世界に戻してやる。反する者はお妃とともに死んでもらう。』

カナヤは、自分を探す人々に混ざりながら、『夢の魔王』のお城の中に入りました。

お城はとても自分の国のお城に似ていました。なので、すぐに『夢の魔王』がいる『王の間』を見つけました。

『夢の魔王』。ネリヤ国王子・カナヤ王子がお前を倒してやる。

出てこい。」

と、『王の間』で大きな声で『夢の魔王』を呼びました。『夢の魔王』は、いすの後ろから出てきました。黒の服に黒のくつ、目は炎のように真っ赤で、とても巨大でした。

「やっと来たか反する者よ。さあ、お前は何のために、いままで旅をしてきたのだ。」

と、『夢の魔王』は聞いたので、カナヤは言いました。

「お前をこの『夢のつぼ』に封印して、『本当の世界』に帰るんだ。」

ワツハツハツ、と『夢の魔王』は大声で笑いました。そして言いました。

「お前は不完全の『夢のつぼ』で我を封印しようとしているのなら、やってみろ。さあ、封印できるかな。」

カナヤは一生けんめい封印するための言葉を試しましたが、全然変化がありません。とうとうカナヤは捕まって、ろつやに入れられてしまいました。そこには、先に捕まえられていたお妃さまが入っていました。

「お母様、大丈夫だった。」

とカナヤは言いました。お妃さまは、

「大丈夫だったわ。カナヤは大丈夫だった。」

カナヤはうなずくと、泣いてしまいました。

「カナヤ、どこか痛い。」

と、お妃さまは聞きました。カナヤは、

「違うよ。けど、僕のせいでみんな、『夢』に閉じこめられてしまった。僕のせいだ。みんな、ごめん、ごめんなさい。」

と、そのとき突然、『夢のつば』が光り出しました。お妃は言いました。

「あなたの素直な心が、最後のひとかけらを引き寄せたのね。さあ、早く封印の言葉を。」

カナヤはつなずくと、素直な言葉を口にしました。

「僕は、お母様と帰りたい。ここに閉じこめられた人たちといっしょに帰りたい。そして、お父様に謝りたい。ごめん、お父様。」

上の階から叫び声が聞こえたかと思うと、お城が崩れはじめました。カナヤはお妃さまに抱きしめられたと同時に、意識が遠のいていきました。

カナヤ王子は、自分のベットの上で起きました。みんなは、心配そうにカナヤを見ていましたが、カナヤの目が開いたのを見ると、安心しました。大臣がみんなの所に来ると、

「大変です。『夢のつば』が元に戻りました。」

と、あわてて言いました。みんな、あわてて見に行き、残ったのは王さまとお妃さまとカナヤ王子だけでした。カナヤ王子は、小さな声で王さまに、「ごめんなさい」と言いました。